

(12) 特許協力条約に基づいて公開された国際出願

(19) 世界知的所有権機関
国際事務局

(43) 国際公開日
2017年11月16日(16.11.2017)



(10) 国際公開番号

WO 2017/195808 A1

(51) 国際特許分類:

C23C 26/00 (2006.01)	C23C 22/68 (2006.01)
B32B 3/14 (2006.01)	C23C 28/00 (2006.01)
B32B 9/00 (2006.01)	C23F 1/00 (2006.01)
B32B 15/092 (2006.01)	C23G 1/12 (2006.01)
B32B 15/20 (2006.01)	C23G 1/34 (2006.01)
C09J 11/06 (2006.01)	C22C 21/02 (2006.01)
C09J 163/00 (2006.01)	C22C 21/06 (2006.01)
C23C 8/10 (2006.01)	C22F 1/00 (2006.01)
C23C 22/66 (2006.01)	C22F 1/05 (2006.01)

(KOBE STEEL, LTD.)) [JP/JP]; 〒6518585 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通二丁目2番4号 Hyogo (JP).

(72) 発明者: 高橋 佑輔 (TAKAHASHI Yusuke). 高田 悟 (TAKADA Satoru).

(74) 代理人: 特許業務法人栄光特許事務所 (EIKOH PATENT FIRM, P.C.); 〒1050003 東京都港区西新橋一丁目7番13号 虎ノ門イーストビルディング10階 Tokyo (JP).

(21) 国際出願番号: PCT/JP2017/017638

(22) 国際出願日: 2017年5月10日(10.05.2017)

(25) 国際出願の言語: 日本語

(26) 国際公開の言語: 日本語

(30) 優先権データ:

特願 2016-094918	2016年5月10日(10.05.2016)	JP
特願 2016-217096	2016年11月7日(07.11.2016)	JP

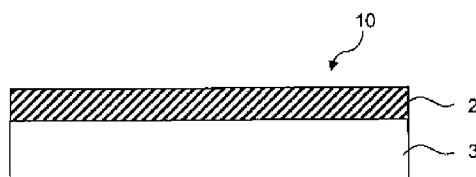
(71) 出願人: 株式会社神戸製鋼所 (KABUSHIKI KAISHA KOBE SEIKO SHO)

(81) 指定国(表示のない限り、全ての種類の国内保護が可能): AE, AG, AL, AM, AO, AT, AU, AZ, BA, BB, BG, BH, BN, BR, BW, BY, BZ, CA, CH, CL, CN, CO, CR, CU, CZ, DE, DJ, DK, DM, DO, DZ, EC, EE, EG, ES, FI, GB, GD, GE, GH, GM, GT, HN, HR, HU, ID, IL, IN, IR, IS, KE, KG, KH, KN, KP, KR, KW, KZ, LA, LC, LK, LR, LS, LU, LY, MA, MD, ME, MG, MK, MN, MW, MX, MY, MZ, NA, NG, NI, NO, NZ, OM, PA, PE, PG, PH, PL, PT, QA, RO, RS, RU, RW, SA, SC, SD, SE, SG, SK, SL, SM,

(54) Title: ALUMINUM ALLOY MATERIAL, ALUMINUM ALLOY MATERIAL PROVIDED WITH ADHESIVE RESIN LAYER, JOINED BODY, AND PRODUCTION METHOD FOR ALUMINUM ALLOY MATERIAL

(54) 発明の名称: アルミニウム合金材、接着樹脂層付きアルミニウム合金材、接合体、及びアルミニウム合金材の製造方法

[図1]



(57) Abstract: The present invention relates to an aluminum alloy material that comprises: an aluminum alloy base material; and a coating film that is formed on at least one portion of the surface of the aluminum alloy base material and that comprises an oxide of aluminum that includes silicon. Over a pre-and-post-coating difference spectrum obtained by Fourier-transform infrared spectroscopy using parallel polarized light that is incident at an angle of 75°, the coating film has an absorption peak top in the wavenumber domain of 1550-1650 cm⁻¹, and the absorbance of the coating film at said peak top is 0.001 or higher. The Si content of the coating film is at least 20 at% but less than 80 at%, the Mg content of the coating film is at least 0.1 at% but less than 30 at%, and the Cu content of the coating film is restricted to less than 0.6 at%.

[続葉有]

WO 2017/195808 A1



ST, SV, SY, TH, TJ, TM, TN, TR, TT, TZ, UA, UG,
US, UZ, VC, VN, ZA, ZM, ZW.

- (84) 指定国(表示のない限り、全ての種類の広域保護が可能): ARIPO (BW, GH, GM, KE, LR, LS, MW, MZ, NA, RW, SD, SL, ST, SZ, TZ, UG, ZM, ZW), ユーラシア (AM, AZ, BY, KG, KZ, RU, TJ, TM), ヨーロッパ (AL, AT, BE, BG, CH, CY, CZ, DE, DK, EE, ES, FI, FR, GB, GR, HR, HU, IE, IS, IT, LT, LU, LV, MC, MK, MT, NL, NO, PL, PT, RO, RS, SE, SI, SK, SM, TR), OAPI (BF, BJ, CF, CG, CI, CM, GA, GN, GQ, GW, KM, ML, MR, NE, SN, TD, TG).

添付公開書類:

- 一 国際調査報告(条約第21条(3))

(57) 要約: 本発明は、アルミニウム合金基材と、前記アルミニウム合金基材の表面の少なくとも一部に形成された、ケイ素を含むアルミニウムの酸化物からなる皮膜を備えるアルミニウム合金材であって、前記皮膜は、フーリエ変換式赤外分光法により入射角 75° の平行偏光を入射して得られる皮膜処理前後での差スペクトルにおいて、 $1550 \sim 1650 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収のピークトップを有し、前記ピークトップにおける吸光度が 0.001 以上であり、かつ、前記皮膜は、Si を 20 原子%以上 80 原子%未満及び Mg を 0.1 原子%以上 30 原子%未満含有するとともに、Cu が 0.6 原子%未満に規制されているアルミニウム合金材に関する。

明 細 書

発明の名称：

アルミニウム合金材、接着樹脂層付きアルミニウム合金材、接合体、及びアルミニウム合金材の製造方法

技術分野

[0001] 本発明は、アルミニウム合金材、接着樹脂層付きアルミニウム合金材、アルミニウム合金材ないし接着樹脂層付きアルミニウム合金材を用いた接合体、及び、アルミニウム合金材の製造方法に関する。

背景技術

[0002] 自動車、船舶及び航空機などの輸送機に用いられる部材の軽量化の観点から、炭素繊維やアルミ合金、鉄鋼材料といった、強度、材質、質量等の異なる異種材料を接合する技術の開発が注目されている。特に、接着樹脂（樹脂接着剤）は、電食による材料の腐食がなく、多様な材料を腐食せずに接合可能なことから、近年積極的に研究されている。しかしながら、高温環境下では、金属と接着樹脂の界面に水分が浸入し、金属表面の腐食・劣化が起こり、金属と接着樹脂の界面で容易に剥離するため、接着強度が著しく低下してしまう。そのため、金属と接着樹脂の界面を腐食から保護し、湿潤環境下でも接着強度を低下させないような前処理が、接着耐久性を左右する重要な因子となる。

[0003] ここで、接着用前処理としては、防食の観点から、金属表面の耐食性や塗料密着性を向上させるための表面処理が知られている。

[0004] 例えば、特許文献1には、ケイ酸エステル、アルミニウム無機塩及びポリエチレングリコールを含有し、シランカップリング剤をさらに含有させた溶液を、亜鉛系めっき鋼板上に塗布、乾燥して皮膜を形成させることで、塗料密着性及び耐白錆性を向上させる手法が記載されている。

[0005] また、特許文献2には、ナトリウム水ガラス等の水ガラスと、アミノシラン等のシランを含む水溶液により、鋼材やアルミニウム合金等の金属材料の

表面を処理することで、塗料密着性を向上させる手法が記載されている。

[0006] また、特許文献3には、テトラエチルオルソシリケート等のテトラアルキルシリケートと、シリカゾル等の水和酸化物ゾルを含む水性組成物でアルミニウム等の金属を処理することにより、その上に形成される接着剤などの塗膜の初期密着性や密着性の長期安定性を向上させる手法が記載されている。

先行技術文献

特許文献

[0007] 特許文献1：日本国特許第3289769号公報

特許文献2：日本国特表2014-502287号公報

特許文献3：日本国特表平10-510307号公報

発明の概要

発明が解決しようとする課題

[0008] しかしながら、特許文献1や特許文献2に記載の手法は、あくまで金属表面の防食や塗料の密着性の改善を目的とするものである。したがって、形成される皮膜は肉厚となるが、肉厚な皮膜では皮膜自身の機械強度が低く、張力や応力に対して脆くなり、高い接着強度を得ることができない。

[0009] また、特許文献3に記載の手法では、長期の湿潤劣化試験により接着強度が著しく減少してしまうため、接着耐久性は十分なものとはいえない。

[0010] 以上のような問題点を鑑みて、本発明は、高温湿潤環境に曝されても、接着強度が低下し難く、接着耐久性に優れたアルミニウム合金材、接着樹脂層付きアルミニウム合金材、アルミニウム合金材ないし接着樹脂層付きアルミニウム合金材を用いた接合体、及び、アルミニウム合金材の製造方法を提供することを主目的とする。

課題を解決するための手段

[0011] 本発明者は、前述した課題を解決するために、鋭意実験検討を行った結果、アルミニウム基材表面に、Mg量、Si量及びCu量が特定の範囲内であり、かつFT-IRスペクトルにおいて特定のピークを有する、ケイ素を含

むアルミニウムの酸化物からなる皮膜を形成することで、優れた接着耐久性が得られることを見出し、本発明に至った。

[0012] 即ち、本発明は、アルミニウム合金基材と、前記アルミニウム合金基材の表面の少なくとも一部に形成された、ケイ素を含むアルミニウムの酸化物からなる皮膜を備えるアルミニウム合金材であって、前記皮膜は、フーリエ変換式赤外分光法により入射角 75° の平行偏光を入射して得られる皮膜処理前後での差スペクトルにおいて、 $1550 \sim 1650 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収のピークトップを有し、前記ピークトップにおける吸光度が 0.001 以上であり、かつ、前記皮膜は、Si を 20 原子%以上 80 原子%未満及び Mg を 0.1 原子%以上 30 原子%未満含有するとともに、Cu が 0.6 原子%未満に規制されているアルミニウム合金材を提供する。

[0013] ここで、前記皮膜中の Si 量、Mg 量、及び Cu 量は、高周波グロー放電発光分光分析法 (GD-OES : Glow Discharge-Optical Emission Spectroscopy) により測定した値である。

[0014] 本発明のアルミニウム合金材においては、前記差スペクトルにおいて、 $1440 \sim 1540 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収を有さないことが好ましい。

また、上記アルミニウム合金材は、皮膜に接着樹脂を直接接合して用いられてもよい。

[0015] また、本発明は、上記アルミニウム合金材の皮膜上に、接着樹脂層が直接形成されている、接着樹脂層付きアルミニウム合金材をも提供する。

[0016] 本発明の接着樹脂層付きアルミニウム合金材においては、接着樹脂層が有機-無機カップリング剤を含んでいることが好ましい。

[0017] また、本発明の接着樹脂層付きアルミニウム合金材においては、接着樹脂層がエポキシ系樹脂を含んでいることが好ましい。

[0018] さらに、本発明は、上記アルミニウム合金材と他の部材とを、接着樹脂を介して接合させた接合体をも提供する。

[0019] さらに、本発明は、上記接着樹脂層付きアルミニウム合金材と他の部材とを、接着樹脂層を介して接合させた接合体をも提供する。

[0020] さらに、本発明は、アルミニウム合金基材の表面の少なくとも一部に、ケイ素を含むアルミニウムの酸化物からなる皮膜を形成する皮膜形成工程を備えるアルミニウム合金材の製造方法であって、前記皮膜形成工程は、前記アルミニウム合金基材の表面に酸化皮膜を形成させる加熱処理段階と、前記加熱処理段階後のエッチング処理段階及びケイ酸塩処理段階とを含み、前記ケイ酸塩処理段階は前記エッチング処理段階より後あるいは前記エッチング処理段階と同時であり、前記ケイ酸塩処理段階として、ケイ酸塩を0.008質量%以上0.5質量%未満含む水溶液で前記酸化皮膜を処理する、アルミニウム合金材の製造方法をも提供する。

[0021] 本発明のアルミニウム合金材の製造方法においては、前記ケイ酸塩を含む水溶液による処理の後には水洗を行わないことが好ましい。

[0022] 本発明のアルミニウム合金材の製造方法においては、前記エッチング処理段階におけるエッチング量を700nm未満に制御することが好ましい。

発明の効果

[0023] 本発明によれば、高温湿潤環境に曝されても、接着強度が低下し難く、接着耐久性に優れたアルミニウム合金材を実現することができる。

図面の簡単な説明

[0024] [図1]図1は、本発明の第1の実施形態に係るアルミニウム合金材の構成を模式的に示す断面図である。

[図2]図2は、図1に示すアルミニウム合金材の製造方法を示すフローチャート図である。

[図3]図3は、本発明の第1の実施形態の変形例に係る接着樹脂層付きアルミニウム合金材の構成を模式的に示す断面図である。

[図4]図4は、図3に示す接着樹脂層付きアルミニウム合金材の製造方法を示すフローチャート図である。

[図5]図5は、本発明の第2の実施形態に係る接合体の構成例を模式的に示す断面図である。

[図6A]図6Aは、本発明の第2の実施形態に係る接合体の他の構成例を模式

的に示す断面図である。

[図6B]図 6 B は、本発明の第 2 の実施形態に係る接合体の他の構成例を模式的に示す断面図である。

[図7]図 7 は、本発明の第 2 の実施形態に係る接合体の他の構成例を模式的に示す断面図である。

[図8A]図 8 A は、本発明の第 2 の実施形態に係る接合体の他の構成例を模式的に示す断面図である。

[図8B]図 8 B は、本発明の第 2 の実施形態に係る接合体の他の構成例を模式的に示す断面図である。

[図9A]図 9 A は凝集破壊率の測定方法を模式的に示す側面図である。

[図9B]図 9 B は凝集破壊率の測定方法を模式的に示す平面図である。

発明を実施するための形態

[0025] 以下、本発明を実施するための形態について、詳細に説明する。なお、本発明は、以下に説明する実施形態に限定されるものではない。

[0026] (第 1 の実施形態)

まず、本発明の第 1 の実施形態に係るアルミニウム合金材について説明する。

本実施形態に係るアルミニウム合金材は、アルミニウム合金基材と、前記アルミニウム合金基材の表面の少なくとも一部に形成された、ケイ素を含むアルミニウムの酸化物からなる皮膜を備えるアルミニウム合金材であって、前記皮膜は、フーリエ変換式赤外分光法により入射角 75° の平行偏光を入射して得られる皮膜処理前後での差スペクトルにおいて、 $1550 \sim 1650 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収のピークトップを有し、前記ピークトップにおける吸光度が 0.001 以上であり、かつ、前記皮膜は、Si を 20 原子%以上 80 原子%未満及びMg を 0.1 原子%以上 30 原子%未満含有するとともに、Cu が 0.6 原子%未満に規制されているアルミニウム合金材である。

[0027] 図 1 は本実施形態のアルミニウム合金材の構成を模式的に示す断面図であ

る。図 1 に示すように、本実施形態のアルミニウム合金材 10 は、アルミニウム合金基材 3（以下、基材 3 ともいう）の表面の少なくとも一部に皮膜 2 が形成されている。

[0028] [基材 3]

基材 3 は、アルミニウム合金からなる。基材 3 を形成するアルミニウム合金の種類は、特に限定されるものではなく、加工される部材の用途に応じて、JIS に規定される又は JIS に近似する種々の非熱処理型若しくは熱処理型のアルミニウム合金から適宜選択して使用することができる。ここで、非熱処理型アルミニウム合金としては、純アルミニウム（1000 系）、Al-Mn 系合金（3000 系）、Al-Si 系合金（4000 系）及び Al-Mg 系合金（5000 系）がある。また、熱処理型アルミニウム合金としては、Al-Cu-Mg 系合金（2000 系）、Al-Mg-Si 系合金（6000 系）及び Al-Zn-Mg 系合金（7000 系）がある。

[0029] 例えば、本実施形態のアルミニウム合金材 10 を自動車用部材に用いる場合は、強度の観点から、基材 3 は 0.2% 耐力が 100MPa 以上であることが好ましい。このような特性を満足する基材を形成可能なアルミニウム合金としては、2000 系、5000 系、6000 系及び 7000 系などのように、マグネシウムを比較的多く含有するものがあり、これらの合金は必要に応じて調質してもよい。また、各種アルミニウム合金の中でも、時効硬化能に優れ、合金元素量が比較的少なくスクラップのリサイクル性や成形性にも優れていることから、6000 系アルミニウム合金を用いることが好ましい。

[0030] [皮膜 2]

皮膜 2 は、基材 3 の表面の少なくとも一部に形成される、ケイ素を含むアルミニウムの酸化物からなる皮膜である。皮膜 2 は、フーリエ変換式赤外分光法（FT-IR）により入射角 75° の平行偏光を入射して得られる皮膜処理前後での差スペクトルにおいて、1550~1650 cm⁻¹ の波数領域に吸収のピークトップを有し、当該ピークトップにおける吸光度が 0.00

1以上であり、かつ、皮膜2は、Siを20原子%以上80原子%未満及びMgを0.1原子%以上30原子%未満含有するとともに、Cuが0.6原子%未満に規制されている。この皮膜2は、接合強度を高くするとともに、接着耐久性の向上を図るために設けられている。以下、皮膜2に含まれる各成分量の好適な範囲について説明する。なお、図1に示されるアルミニウム合金材では、基材3の一方の表面の全部に皮膜2が形成されているが、本実施形態はこれに限定されるものではない。例えば、基材3の表面の一部のみに皮膜2が形成されていてもよい。また、基材3の両面に皮膜2が形成されていてもよい。

[0031] <FTIRスペクトル>

本実施形態のアルミニウム合金材における皮膜の形成メカニズムを以下に説明する。まず、アルミニウム基材表面の酸化皮膜にケイ酸塩の水溶液を接触させると、より耐食性に優れたアルミノケイ酸塩の複合酸化物が生成する。次に、皮膜表面に残った微量の未反応のケイ酸塩を含む水溶液が、乾燥中に大気中の二酸化炭素と反応し、炭酸水素塩と二酸化ケイ素が生成することで、皮膜が緻密となり、皮膜の耐食性がさらに高められると考えられる。

[0032] ここで、炭酸水素塩は、FTIR分析において、 $1550\sim1650\text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収波長を有する。本実施形態のアルミニウム合金材は、皮膜が形成されている表面のFTIR分析において、皮膜処理前後での差スペクトルの $1550\sim1650\text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収のピークトップを有し、そのピークトップにおける吸光度が0.001以上であり、炭酸水素塩と二酸化ケイ素が十分に生成して緻密な皮膜が形成されており、皮膜の強度に優れるとともに、耐食性にも優れている。 $1550\sim1650\text{ cm}^{-1}$ の波数領域の吸収のピークトップにおける吸光度は、好ましくは0.005以上であり、より好ましくは0.007以上である。

[0033] 一方、皮膜上に未反応のケイ酸塩が過剰に存在すると、乾燥後にも皮膜表面にケイ酸塩が残存し、その一部は大気中の二酸化炭素と反応して炭酸塩を生じる。このようにして形成される皮膜は肉厚であり、皮膜表面に炭酸塩や

ケイ酸塩の微粒子が残存する。そのような皮膜は脆く、また、接着樹脂との密着性にも劣るため、接着耐久性は著しく低下することとなる。

[0034] 上記のメカニズムは高周波グロー放電発光分光分析（GD-OES分析）からも支持される。すなわち、GD-OES分析によれば、 $1550\sim1650\text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収波長を有するアルミニウム合金材は、最表面から基材にかけて、二酸化ケイ素を含むアルミノケイ酸複合酸化皮膜の層を有することが観察される。一方、 $1440\sim1540\text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収を有するアルミニウム合金材については、最表面に炭酸塩を含む層が濃化している様子が観察される。

[0035] ここで、炭酸塩は、FT-IR分析において、 $1440\sim1540\text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収波長を有する。以上の観点から、本実施形態のアルミニウム合金材は、皮膜が形成されている表面のFT-IR分析において、皮膜処理前後での差スペクトルの $1440\sim1540\text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収を有さないことが好ましい。すなわち、本実施形態のアルミニウム合金材における皮膜は、FT-IR分析による皮膜処理前後での差スペクトルにおいて、 $1440\sim1540\text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収を有さない複合酸化物からなることが好ましい。なお、本明細書において「 $1440\sim1540\text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収を有さない」とは、 $1440\sim1540\text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸光度が測定されないことを意味する。

なお、皮膜処理前後での差スペクトルとは、皮膜が形成されたアルミニウム合金材の、皮膜が形成されている表面の吸収スペクトルと、皮膜が形成されていないアルミニウム合金基材の吸収スペクトルとの間の差である。

[0036] <Mg含有量：0.1原子%以上30原子%未満>

アルミニウム合金材の基材を構成するアルミニウム合金には、通常、合金成分としてマグネシウム（Mg）が含まれており、このような基材3の表面にアルミニウムとマグネシウムの複合酸化物である酸化皮膜を形成すると、表面にマグネシウムが濃化した状態で存在することとなる。このため、酸化皮膜上に接着樹脂を形成すると、表面のマグネシウムが接着界面の弱境界層

となり、初期の接合強度が低下する。

[0037] また、水分、酸素などが浸透してくる高温湿潤環境においては、接着樹脂との界面の水和や基材の腐食の原因となり、アルミニウム合金材の接合強度を低下させる。具体的には、皮膜中のMg含有量が30原子%以上になると、アルミニウム合金材の接合強度が低下する傾向がある。そこで、本実施形態のアルミニウム合金材10では、皮膜2におけるMg含有量を30原子%未満に規制する。これにより、接着耐久性を向上することができる。皮膜2のMg含有量は、接着耐久性向上の観点から、25原子%未満が好ましく、20原子%未満がより好ましく、さらに好ましくは10原子%未満である。

[0038] 一方、皮膜2のMg含有量の下限値は、経済性の観点から0.1原子%以上とする。なお、ここでいう皮膜2中のMg含有量は、高周波グロー放電発光分光分析法（GD-OES）により測定することができる。

[0039] 皮膜2のMg含有量を調整する方法は、特に限定されるものではないが、例えば、硝酸、硫酸及びフッ酸などの酸若しくは混酸等の酸性溶液、又は水酸化カリウム、水酸化ナトリウム、ケイ酸塩及び炭酸塩などを含むアルカリ溶液で表面処理する方法を適用することができる。この方法は、マグネシウムを酸又はアルカリ溶液に溶解させることにより、皮膜2のMg含有量を調整するものであり、処理時間、温度、表面処理液の濃度やpHを調整することで、皮膜2中のMg量を前述した範囲にすることができる。なお、不純物元素程度にMgが含有されている場合であっても、調質で高温の熱処理が行われるとMgが皮膜2中に濃化する場合があります、酸やアルカリでの表面処理による調整が適宜必要である。また、表面処理の薬液中にMgイオンを含有させて調整することも可能である。

[0040] <Si含有量：20原子%以上80原子%未満>

ケイ素は、皮膜2の耐食性を向上させ湿潤環境下で安定化させる効果があるため、皮膜2に珪素を含有させることにより、接合強度の低下を抑制することが可能となる。

[0041] ただし、皮膜2におけるSi含有量が20原子%未満の場合、前述した効

果が小さくなる傾向があり、また、S i 含有量が80原子%以上であると、皮膜が肉厚で脆弱となり、その結果接着強度が大きく低下する傾向がある。また、スポット溶接性や化成処理の均一性が低下する傾向にある。そこで、本実施形態のアルミニウム合金材10では、皮膜2におけるS i 含有量を、20原子%以上80原子%未満とする。

[0042] 接着耐久性向上の観点から、皮膜2におけるS i 含有量は、25原子%以上であることが好ましく、30原子%以上であることがより好ましい。また、接着強度の低下防止、及びスポット溶接性や化成処理の均一性の観点からは、皮膜2におけるS i 含有量は、75原子%未満であることが好ましく、70原子%未満であることがより好ましい。

[0043] 皮膜2中のS i 含有量は、例えば、Mg量を調整する方法として記載したものと同様に、酸やアルカリによる表面処理を行うことによって調整される。また、上述した、ケイ酸ナトリウムやケイ酸カリウムなどのケイ酸塩を含む水溶液による処理の条件によって調整される。

[0044] <Cu含有量：0.6原子%未満>

皮膜2を形成する際に基材3に対して脱脂工程や酸洗工程などにより過剰なエッチングを行うと、基材3に含まれるCuが表面に濃化し、皮膜2のCu含有量が増加する。皮膜2の表面にCuが存在すると、皮膜2の表面上に直接接合される接着樹脂との密着力が低下する。

[0045] そこで、本実施形態のアルミニウム合金材では、皮膜2中のCu含有量を0.6原子%未満に規制する。なお、皮膜2におけるCu量は、接着樹脂との密着性向上の観点から、0.5原子%未満であることが好ましい。

[0046] 皮膜2中のCu含有量の制御には、前処理によるエッチング量を調整する必要があるが、エッチング方法は限定されるものではなく、例えば、Mgの数値限定で記載したのと同様の処理方法を適用することができる。すなわち、例えば、酸又はアルカリ溶液による処理によりエッチングを行うことができる。

[0047] ここで、皮膜2中のMg量、S i 量、及びCu量等の元素濃度は、例えば

、高周波グロー放電発光分光分析法（GD-OES：Glow Discharge-Optical Emission Spectroscopy）により測定することができる。本実施形態においては、GD-OESにより、基材3の厚さ方向に、酸素（O）、窒素（N）及び炭素（C）を除く各元素、具体的にはアルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、ナトリウム（Na）、カルシウム（Ca）、銅（Cu）、鉄（Fe）及びチタン（Ti）などの金属元素並びに珪素（Si）などの元素を測定し、その結果からMg、Si、Cu、Al等の含有量を百分率で算出した値を各元素の量とする。

[0048] <膜厚>

皮膜2の膜厚は、1～30nmであることが好ましい。皮膜2の膜厚が1nm未満の場合、基材3を作製する際に使用される防錆油やアルミニウム合金材10から接合体又は自動車用部材を製造する際に使用されるプレス油中のエステル成分の吸着が抑制される。このため、皮膜2を設けなくても、アルミニウム合金材10の脱脂性、化成処理性及び接着耐久性を確保することができる。しかしながら、皮膜2の膜厚を1nm未満に制御するには、過度の酸洗浄などが必要となるため、生産性が劣り、実用性が低下しやすい。また、アルカリ脱脂や酸による過剰なエッチングは基材3に含有されるCuが表面濃化する原因となり、接着耐久性の低下の原因となる。

[0049] 一方、皮膜2の膜厚が30nmを超えると、皮膜量が過剰となり、表面に凹凸ができやすくなる。そして、皮膜2の表面に凹凸が生じると、例えば自動車用途において塗装工程の前に行う化成処理の際に化成斑が生じやすくなり、化成性の低下を招く。なお、皮膜2の膜厚は、化成性及び生産性などの観点から、2nm以上20nm未満であることがより好ましい。

[0050] [製造方法]

次に、本実施形態のアルミニウム合金材の製造方法について説明する。図2は、図1に示される本実施形態のアルミニウム合金材10の製造方法を示すフローチャート図である。図2に示すように、本実施形態のアルミニウム合金材10を製造する際は、基材作製工程S1と、皮膜形成工程S2を行う

。以下、各工程について説明する。

[0051] <ステップS 1：基材作製工程>

基材の形状は特に限定されるものではなく、アルミニウム合金材を用いて作製する部材の形状等に応じて、板状の他、鑄造材、鍛造材、押し出し材（例えば、中空棒状等）等としてとりうる任意の形状であってもよい。基材作製工程S 1では、例として板状の基材（基板）を作製する場合には、例えば下記の手順で、基板を作製する。まず、所定の組成を有するアルミニウム合金を、連続鑄造により溶解し、鑄造して鑄塊を作製する（溶解鑄造工程）。次に、作製した鑄塊に均質化熱処理を施す（均質化熱処理工程）。その後、均質化熱処理された鑄塊に、熱間圧延を施して熱延板を作製する（熱間圧延工程）。そして、この熱延板に300～580℃で荒焼鈍又は中間焼鈍を行い、最終冷間圧延率5%以上の冷間圧延を少なくとも1回施して、所定の板厚の冷延板（基板）を得る（冷間圧延工程）。

[0052] 冷間圧延工程では、荒焼鈍又は中間焼鈍の温度を300℃以上とすることが好ましく、これにより、成形性向上の効果がより発揮される。また、荒焼鈍又は中間焼鈍の温度は、580℃以下とすることが好ましく、これにより、バーニングの発生による成形性の低下を抑制しやすくなる。一方、最終冷間圧延率は、5%以上とすることが好ましく、これにより、成形性向上の効果がより発揮される。なお、均質化熱処理及び熱間圧延の条件は、特に限定されるものではなく、熱延板を通常得る場合の条件で行うことができる。また、中間焼鈍は行わなくてもよい。

[0053] <ステップS 2：皮膜形成工程>

皮膜形成工程（ステップS 2）では、ステップS 1の基材作製工程で作製された基材の表面の少なくとも一部（すなわち、一部又は全部）に、皮膜を形成する。本実施形態において、皮膜形成工程（ステップS 2）は、具体的には、例えば、基材3を加熱処理して酸化皮膜を形成する加熱処理段階と、当該加熱処理段階後のエッチング処理段階及びケイ酸塩処理段階とを備える。ここで、ケイ酸塩処理段階としてケイ酸塩を含む水溶液で処理する。これ

により、皮膜中のMg量、Si量、及びCu量が特定の範囲になるように、また、FT-IRスペクトルにおいて特定のピークを有するように、皮膜を形成する。

[0054] 加熱処理段階における加熱処理としては、基材3を、例えば400～580℃の温度に加熱して、基材3の表面に酸化皮膜を形成する。また、加熱処理は、アルミニウム合金材10の強度を調整する効果もある。なお、ここで言う加熱処理は、基材3が熱処理型アルミニウム合金で形成されている場合には溶体化処理であり、基材3が非熱処理型アルミニウム合金で形成されている場合には、焼鈍（最終焼鈍）における加熱処理である。

[0055] この加熱処理は、強度向上の観点から、加熱速度100℃/分以上の急速加熱とすることが好ましい。また、加熱温度を400℃以上に設定して急速加熱することで、アルミニウム合金材10の強度や、そのアルミニウム合金材10の塗装後加熱（ベーキング）した後の強度を、より高めることができる。一方、加熱温度を580℃以下に設定して急速加熱することにより、バーニングの発生による成形性の低下を抑制することができる。更に、強度を向上させる観点からは、加熱処理における保持時間は3～30秒とすることが好ましい。このように基材3を、加熱温度400～580℃で加熱すると、基材3の表面に、例えば、膜厚が1～30nmの酸化皮膜が形成される。なお、加熱処理の前には、必要に応じてアルカリ脱脂等を行ってもよい。

[0056] 加熱処理後のエッチング処理段階においては、基材3上に形成された酸化皮膜の表面の一部又は全部に対して、酸性溶液による処理（酸洗）及びアルカリ溶液による処理（アルカリ洗浄、アルカリ脱脂）のうちの少なくとも1つを行う。酸洗の際に用いる薬液（酸洗剤）は、特に限定されるものではないが、例えば、硫酸、硝酸及びフッ酸から選ばれる群からなる1種以上を含む溶液を用いることができる。また、酸洗剤には、脱脂性を高めるために界面活性剤を含有させてもよい。また、酸洗の条件は、基材3の合金組成や酸化皮膜の厚み等を考慮して適宜設定することができ、特に限定されないが、たとえば、pHが2以下、処理温度10～80℃、処理時間1～120秒の

条件を適用することができる。

[0057] また、アルカリ洗浄（アルカリ脱脂）の際に用いる薬液も、特に限定されるものではないが、例えば、水酸化ナトリウム及び水酸化カリウムから選ばれる群からなる１種以上を含む溶液を用いることができる。また、アルカリ溶液による処理の条件は、基材３の合金組成や酸化皮膜の厚み等を考慮して適宜設定することができ、特に限定されないが、例えば、pHが１０以上、処理温度１０～８０℃、処理時間１～１２０秒の条件を適用することができる。

[0058] なお、アルカリ洗浄を行う場合においては、アルカリ洗浄よりも後に、酸洗を行うことが好ましい。この理由は以下のとおりである。すなわち、アルカリ洗浄では、基材表面のMgを除去することが難しく、基材表面のMgの存在によりエッチング量を増やす必要がある。しかしながら、エッチング量が増えるとCuの濃化の原因となることから、酸洗でMgを除去する必要があるためである。

[0059] また、各薬液での洗浄後にはリンスを行うことが好ましい。リンスの方法は特に限定されないが、例えば、スプレー、浸漬等が挙げられる。また、リンスに用いられる洗浄液としては、例えば、工業水、純水、イオン交換水等が挙げられる。

[0060] なお、銅を含むアルミニウム合金の過多のエッチングは、表面において銅の濃化を引き起し、劣化環境である高温湿潤環境において、接着樹脂の劣化の原因となる。したがって、酸化皮膜のエッチング量が、好ましくは７００nm未満、より好ましくは５００nm未満となるように処理条件を調整する。

[0061] ここで、本願明細書中におけるエッチング処理段階におけるエッチング量とは、酸化皮膜や酸化皮膜を含む基材の溶解量であり、エッチング処理前後の重量の減少量を測定し、それを厚み（膜厚）として見積もることができる。なお、重量の減少量から膜厚への換算は、便宜上、アルミニウムの密度： 2.7 g/cm^3 を用い、アルミニウムの厚みとして計算することにより行う。

ものとする。また、酸化皮膜に加えて、酸化皮膜下の基材の一部もエッチングされる場合には、酸化皮膜と基材のエッチング量の合計を、上記エッチング量とする。

[0062] また、ケイ酸塩処理段階として、酸化皮膜を有する基材を、ケイ酸塩を含む水溶液（ケイ酸塩水溶液）で処理する。ここで、ケイ酸塩水溶液による処理には、ケイ酸塩水溶液の塗布の他、ケイ酸塩水溶液中への浸漬等も包含される。ケイ酸塩水溶液による処理を行うと、炭酸水素塩と二酸化ケイ素が生成し、酸化皮膜がより緻密な皮膜2となり、皮膜自体の強度が向上するとともに、耐食性も向上する。なお、ケイ酸塩処理段階は、皮膜形成工程の実質的な膜形成の最終段階として行われるものであり、ケイ酸塩処理の後に酸洗は行わない。ただし、ケイ酸塩水溶液による処理の後の乾燥は、当該ケイ酸塩処理段階に含まれるものとする。

[0063] ここで、水溶液のpHが7よりも低いとケイ酸塩が沈殿するため、アルミニウムとケイ素が反応することができなくなる。したがって、ケイ酸塩水溶液のpHは7以上とする必要があり、好ましくは8以上であり、より好ましくは9以上である。また、ケイ酸塩水溶液のpHの上限は特に限定されるものではないが、溶液の取り扱い易さや安全性の観点からは、例えば14以下であり、好ましくは13以下である。なお、ケイ酸塩水溶液のpHは、例えば水酸化ナトリウムや炭酸ナトリウム、アンモニアなどの塩基を添加すること等により、適宜調整することができる。

[0064] 酸化皮膜に塗布するケイ酸塩水溶液中のケイ酸塩の濃度は、0.008質量%以上0.5質量%未満であることが好ましい。ケイ酸塩水溶液中のケイ酸塩の濃度が0.008質量%以上であると、乾燥により炭酸水素塩と二酸化ケイ素が十分に生成されるため、皮膜が緻密となり、強度と耐食性に優れた皮膜を形成することができる。同様の観点から、ケイ酸塩水溶液中のケイ酸塩の濃度は、より好ましくは0.02質量%以上であり、さらに好ましくは0.06質量%以上である。一方、ケイ酸塩水溶液中のケイ酸塩の濃度が過度に高いと、乾燥後にも皮膜表面にケイ酸塩が残存し、その一部が大気中

の二酸化炭素と反応して炭酸塩を生じるおそれがある。この場合、形成される皮膜は肉厚となり、また、皮膜表面に炭酸塩やケイ酸塩の微粒子が残存することとなる。その結果、形成される皮膜は脆く、また、接着樹脂との密着性にも劣り、接着耐久性が著しく低下するおそれがある。

したがって、これを防止する観点から、ケイ酸塩水溶液中のケイ酸塩の濃度は、0.5質量%未満とすることが好ましく、より好ましくは0.3質量%未満であり、さらに好ましくは0.2質量%未満である。

[0065] ケイ酸塩水溶液に含まれるケイ酸塩の種類は特に限定されないが、例えば、塩基性のケイ酸塩としては、リチウム、ナトリウム、カリウム等のアルカリ金属のケイ酸塩や、アンモニウムケイ酸塩などが挙げられる。ここで、ケイ酸塩としては、1種のみを単独で用いてもよく、2種以上を組み合わせてもよい。

リチウムケイ酸塩としては、例えば、ケイ酸リチウム等が挙げられる。

ナトリウムケイ酸塩 ($m\text{Na}_2\text{O} \cdot n\text{SiO}_2$ と表記でき、以下において n/m をモル比で表す) としては、例えば、結晶質のオルト珪酸ナトリウム (n/m : 約0.5前後)、メタ珪酸ナトリウム (n/m : 約1前後) や層状結晶の珪酸ナトリウム (n/m : 約2~3程度の範囲)、または非晶質の珪酸ナトリウム、または液体の水ガラス (JISの1号、2号、3号) 等が挙げられる。

カリウムケイ酸塩としては、例えば、ケイ酸カリウム等が挙げられる。

[0066] ケイ酸塩水溶液の塗布方法としては、浸漬処理、スプレー、ロールコート、バーコート、静電塗布等が挙げられる。

[0067] また、酸化皮膜をケイ酸塩水溶液で処理した後は、水洗（リンス）を行わないことが好ましい。水洗（リンス）を行うと、皮膜の表面に残存する未反応のケイ酸塩水溶液が除去される結果、乾燥後にも炭酸水素塩と二酸化ケイ素が十分に生成されず、緻密な皮膜が得られなくなるおそれがある。

[0068] ケイ酸塩水溶液による処理後には、ケイ酸塩水溶液を乾燥させる。乾燥温度は、好ましくは70℃以上、より好ましくは80℃以上、更に好ましくは

90℃以上である。また、乾燥温度が高すぎると、アルミニウム合金の特性に影響を及ぼすため、当該乾燥温度は、好ましくは220℃以下、より好ましくは200℃以下、更に好ましくは190℃以下である。また、乾燥時間は、乾燥温度にもよるが、好ましくは2秒以上であり、より好ましくは5秒以上であり、さらに好ましくは10秒以上である。また、当該乾燥時間は、好ましくは20分以下、より好ましくは5分以下、さらに好ましくは2分以下である。

[0069] ケイ酸塩水溶液の塗布量は、十分な接着耐久性の向上効果を得る観点から、乾燥後の皮膜量が1mg/m²以上30mg/m²以下となるように調整することが好ましい。また、より好ましくは、乾燥後の皮膜量が1.5mg/m²以上20mg/m²以下となるように調整する。ケイ酸塩水溶液の塗布量が少なすぎると、ケイ酸塩の量が少なくなりすぎ、良好な接着耐久性を得られない場合がある。また、ケイ酸塩水溶液の塗布量が多くなりすぎると、形成される皮膜が厚くなりすぎて皮膜内で剥離がおこり、接着耐久性が損なわれる場合がある。

[0070] なお、上記したステップS1の皮膜形成工程では、エッチング処理段階の後にケイ酸塩処理段階を行っているが、これらを1回の処理で行ってもよい。具体的には、例えば、ケイ酸塩を含む、中性又はアルカリ性の水溶液を用いて酸化皮膜を処理してもよい。

[0071] <その他の工程>

本実施形態のアルミニウム合金材10の製造方法では、前述した各工程に悪影響を与えない範囲において、各工程の間又は前後に、他の工程を含めてもよい。例えば、皮膜形成工程S2後に、予備時効処理を施す予備時効処理工程を設けてもよい。この予備時効処理は、72時間以内に40～120℃で、8～36時間の低温加熱することにより行うことが好ましい。この条件で予備時効処理することにより、成形性及びベーキング後の強度向上を図ることができる。その他に、例えばアルミニウム合金材10の表面の異物を除去する異物除去工程や、各工程で発生した不良品を除去する不良品除去工程

などを行ってもよい。

[0072] そして、製造されたアルミニウム合金材 10 は、接合体の作製前又は自動車用部材への加工前に、その表面にプレス油が塗布される場合がある。プレス油は、エステル成分を含有するものが主に使用される。アルミニウム合金材 10 にプレス油を塗布する方法や条件は、特に限定されるものではなく、通常のプレス油を塗布する方法や条件が広く適用でき、例えば、エステル成分としてオレイン酸エチルを含有するプレス油に、アルミニウム合金材 10 を浸漬すればよい。なお、エステル成分もオレイン酸エチルに限定されるものではなく、ステアリン酸ブチルやソルビタンモノステアレートなど、様々なものを利用することができる。

[0073] 以上詳述したように、本実施形態のアルミニウム合金材の製造方法によれば、ケイ酸塩水溶液による処理後の水洗や、シランカップリング剤による処理等の処理を行わなくとも高い接着耐久性を与える皮膜が得られるため、プロセス全体を縮小化でき、生産効率の観点からも非常に有用である。

[0074] 本実施形態のアルミニウム合金材は、皮膜に接着樹脂を直接接合して用いられてもよい。ここで、上述したように、アルミニウム合金材の表面には、プレス油が塗布される場合があるが、本明細書においては、プレス油を塗布したアルミニウム合金材に接着樹脂を接合して用いる場合も、アルミニウム合金材の皮膜に接着樹脂を直接接合して用いることに包含されるものとする。

[0075] (第 1 の実施形態の変形例)

次に、本発明の第 1 の実施形態の変形例に係る接着樹脂層付きアルミニウム合金材について説明する。図 3 は本変形例の接着樹脂層付きアルミニウム合金材の構成を模式的に示す断面図である。なお、図 3 においては、図 1 に示すアルミニウム合金材 10 の構成要素と同じものには同じ符号を付し、その詳細な説明は省略する。図 3 に示すように、本変形例の接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 は、前述した第 1 の実施形態のアルミニウム合金材における皮膜 2 を覆うように、接着樹脂層 4 が直接形成されている。

[0076] [接着樹脂層 4]

接着樹脂層 4 は、接着樹脂等からなり、本変形例の接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 は、この接着樹脂層 4 を介して他の部材と接合される。なお、他の部材には、接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 と同様に皮膜が形成されている別のアルミニウム合金材、酸化皮膜が形成されていないアルミニウム合金材、樹脂成形体等が包含される。

[0077] 接着樹脂層 4 を構成する接着樹脂は、特に限定されるものではなく、エポキシ系樹脂、ウレタン系樹脂、ニトリル系樹脂、ナイロン系樹脂、アクリル系樹脂など、従来からアルミニウム合金材を接合する際に用いられてきた接着樹脂を用いることができる。なかでも、接着強度の観点からは、エポキシ系樹脂が好ましい。また、接着樹脂は 1 種のみを用いてもよく、あるいは複数を組み合わせて用いてもよい。

[0078] 接着樹脂層 4 の厚さも、特に限定されるものではないが、 $10 \sim 500 \mu\text{m}$ が好ましく、 $50 \sim 400 \mu\text{m}$ がより好ましい。接着樹脂層 4 の厚さが $10 \mu\text{m}$ 未満の場合には、接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 と、他の接着樹脂層を備えていないアルミニウム合金材とを接着樹脂層 4 を介して接合する場合に、高い接着耐久性が得られないことがある。一方、接着樹脂層 4 の厚さが $500 \mu\text{m}$ を超える場合には、接着強度が小さくなる場合がある。

[0079] また、接着樹脂層 4（接着樹脂）は、有機－無機カップリング剤をさらに含有していてもよい。接着樹脂層 4（接着樹脂）に含まれる有機－無機カップリング剤の種類は特に限定されないが、例えば、シランカップリング剤の他、チタネート系カップリング剤やアルミネート系カップリング剤、ホスフェート系カップリング剤などが使用可能である。また、シランカップリング剤としては、接着樹脂と反応性の高いビニル基、スチリル基、アクリル基、メタクリル基、エポキシ基、アミノ基、ウレイド基、メルカプト基、イソシアネート基等の官能基を少なくとも一つ以上有するシランカップリング剤を使用することが好ましい。シランカップリング剤の有する官能基の好適な具体例としては、例えば、エポキシ基、アミノ基、ウレイド基等が挙げられる。

。ここで、有機－無機カップリング剤としては、１種のみを単独で用いてもよく、２種以上を組み合わせ用いてもよい。

[0080] [製造方法]

次に、本変形例の接着樹脂層付きアルミニウム合金材１１の製造方法について説明する。図４は、図３に示される本変形例の接着樹脂層付きアルミニウム合金材１１の製造方法を示すフローチャート図である。図４に示すように、本変形例の接着樹脂層付きアルミニウム合金材１１を製造する際は、前述したステップＳ１～Ｓ２に加えて、接着樹脂層形成工程Ｓ３を行う。

[0081] <ステップＳ３：接着樹脂層形成工程>

接着樹脂層形成工程Ｓ３では、皮膜２を覆うように、接着樹脂層４を形成する。接着樹脂層４の形成方法は、特に限定されるものではないが、例えば、接着樹脂が固体である場合には、熱を加えて圧着したり、これを溶剤に溶解させて溶液とした後に、また、接着樹脂が液状である場合にはそのまま、皮膜２の表面に噴霧したり塗布する方法が挙げられる。

[0082] また、本変形例の接着樹脂層付きアルミニウム合金材１１においても、前述した第１の実施形態と同様に、皮膜形成工程Ｓ２及び／又は接着樹脂層形成工程Ｓ３の後に、予備時効処理を施す予備時効処理工程を設けてもよい。

[0083] 本変形例の接着樹脂層付きアルミニウム合金材においては、接着樹脂層をあらかじめ備えるため、接合体や自動車用部材を作製する際に、アルミニウム合金材の表面に接着樹脂を塗布するなどの作業を省略することができる。なお、本変形例の接着樹脂層付きアルミニウム合金材における上記以外の構成及び効果は、前述した第１の実施形態と同様である。

[0084] (第２の実施形態)

次に、本発明の第２の実施形態に係る接合体について説明する。本実施形態の接合体は、前述した第１の実施形態のアルミニウム合金材又はその変形例の接着樹脂層付きアルミニウム合金材を用いたものである。図５～８Ｂは本実施形態の接合体の構成例を模式的に示す断面図である。なお、図５～８Ｂにおいては、図１及び３に示すアルミニウム合金材１０、接着樹脂層付き

アルミニウム合金材 10 の構成要素と同じものには同じ符号を付し、その詳細な説明は省略する。

[0085] [接合体の構成]

本実施形態の接合体は、例えば、図 5 に示す接合体 20 のように、図 1 に示す 2 枚のアルミニウム合金材 10 を、皮膜 2 が形成されている面同士が対向するように配置し、接着樹脂 5 を介して接合した構成とすることができる。即ち、接合体 20 では、接着樹脂 5 は、一面が一方のアルミニウム合金材 10 の皮膜 2 側に接合され、その他面が他方のアルミニウム合金材 10 の皮膜 2 側に接合されている。

[0086] ここで、本実施形態の接合体における接着樹脂 5 は、前述した接着樹脂層 4 を構成する接着樹脂と同様のものを使用することができる。具体的には、接着樹脂 5 は、エポキシ系樹脂、ウレタン系樹脂、ニトリル系樹脂、ナイロン系樹脂、アクリル系樹脂などを使用することができる。また、接着樹脂 5 の厚さは、特に限定されるものではないが、接着強度向上の観点から、10～500 μm が好ましく、より好ましくは 50～400 μm である。

[0087] 接合体 20 では、前述したように、接着樹脂 5 の両面が、第 1 の実施形態のアルミニウム合金材 10 の皮膜 2 であるため、自動車用部材に用いた際、高温湿潤環境に曝されても、接着樹脂 5 と皮膜 2 との界面の接着強度が低下しにくく、接着耐久性が向上する。また、本実施形態の接合体 20 では、接着樹脂 5 の種類に影響されず、従来からアルミニウム合金材の接合に用いられている接着樹脂全般において界面での接着耐久性が向上する。

[0088] また、図 6 A に示す接合体 21 a 又は図 6 B に示す接合体 21 b のように、図 1 に示すアルミニウム合金材 10 の皮膜 2 が形成されている面に、接着樹脂 5 を介して、皮膜 2 が形成されていない他のアルミニウム合金材 6 又は樹脂成形体 7 を接合した構成とすることもできる。

[0089] ここで、皮膜 2 が形成されていない他のアルミニウム合金材 6 には、前述した基材 3 と同様のものを使用することができ、具体的には、JIS に規定される又は JIS に近似する種々の非熱処理型若しくは熱処理型アルミニウ

ム合金からなるものを使用することができる。

[0090] また、樹脂成形体 7 としては、例えば、ガラス繊維強化プラスチック（GFRP）、炭素繊維強化プラスチック（CFRP）、ボロン繊維強化プラスチック（BFRP）、アラミド繊維強化プラスチック（AFRP, KFRP）、ポリエチレン繊維強化プラスチック（DFRP）及びザイロン強化プラスチック（ZFRP）などの各種繊維強化プラスチックにより形成した繊維強化プラスチック成形体を用いることができる。これらの繊維強化プラスチック成形体を用いることにより、一定の強度を維持しつつ、接合体を軽量化することが可能となる。

[0091] なお、樹脂成形体 7 は、前述した繊維強化プラスチック以外に、ポリプロピレン（PP）、アクリルブタジエンスチレン共重合体（ABS）樹脂、ポリウレタン（PU）、ポリエチレン（PE）、ポリ塩化ビニル（PVC）、ナイロン 6、ナイロン 6, 6、ポリスチレン（PS）、ポリエチレンテレフタレート（PET）、ポリアミド（PA）、ポリフェニレンスルフィド（PPS）、ポリブチレンテレフタレート（PBT）、ポリフタルアミド（PPA）などの繊維強化されていない樹脂を使用することもできる。

[0092] 図 6 A 及び図 6 B に示す接合体 21 a, 21 b では、接着樹脂 5 の片面がアルミニウム合金材 10 の皮膜 2 側に接合されているため、前述した接合体 20 と同様に、自動車用部材に用いた際、高温湿潤環境に曝されても、接着樹脂の種類に影響されず、界面での接着耐久性が向上する。また、図 6 B に示す接合体 21 b は、アルミニウム合金材 10 と樹脂成形体 7 とを接合しているため、アルミニウム合金材同士の接合体に比べて軽量であり、この接合体 21 b を用いることにより自動車の更なる軽量化を実現することができる。なお、図 6 A 及び図 6 B に示す接合体 21 a, 21 b における上記以外の構成及び効果は、図 5 に示す接合体 20 と同様である。

[0093] 更に、図 7 に示す接合体 22 のように、図 3 に示す接着樹脂層 4 を備えた接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 と、図 1 に示す接着樹脂層 4 を備えていないアルミニウム合金材 10 とを接合した構成とすることもできる。具

体的には、接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 の接着樹脂層 4 側に、アルミニウム合金材 10 の皮膜 2 側が接合されたものである。その結果、アルミニウム合金材 10 の皮膜 2 と接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 の皮膜 2 は、それぞれ接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 の接着樹脂層 4 を介して、互いに対向するように配置された構成となっている。

[0094] 接合体 22 では、接着樹脂層 4 の両面がアルミニウム合金材 10 の皮膜 2 と接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 の皮膜 2 にそれぞれ接合されているため、前述した接合体 20 と同様に、接合体 22 を自動車用部材に用いた際に、高温湿潤環境に曝されても、接着樹脂の種類に影響されず、界面での接着耐久性が向上する。なお、図 7 に示す接合体 22 における上記以外の構成及び効果は、図 5 に示す接合体 20 と同様である。

[0095] 更に、図 8 A に示す接合体 23 a 又は図 8 B に示す接合体 23 b のように、図 3 に示す接着樹脂層 4 を備えた接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 の接着樹脂層 4 側に、皮膜 2 が形成されていない他のアルミニウム合金材 6 又は繊維強化プラスチック成形体などの樹脂成形体 7 を接合した構成とすることもできる。これら接合体 23 a, 23 b では、接着樹脂層 4 の片面が接着樹脂層付きアルミニウム合金材 11 の皮膜 2 側に接合されているため、前述した接合体 20 と同様に、接合体 23 を自動車用部材に用いる際、高温湿潤環境に曝されても、接着樹脂の種類に影響されず、界面での接着耐久性が向上する。

[0096] また、図 8 B に示す接合体 23 b は、接着剤層付きアルミニウム合金材 11 と樹脂成形体 7 とを接合しているため、アルミニウム合金材同士の接合体に比べて軽量であり、軽量化が求められている自動車や車両の部材に好適である。なお、図 8 A 及び図 8 B に示す接合体 23 a, 23 b における上記以外の構成及び効果は、図 5 に示す接合体 20 と同様である。

[0097] [接合体の製造方法]

前述した接合体 20 ～ 23 の製造方法、特に接合方法は、従来公知の接合方法を用いることができる。そして、接着樹脂 5 をアルミニウム合金材に形

成する方法は、特に限定されるものではないが、例えば、予め接着樹脂 5 によって作製した接着シートを用いてもよいし、接着樹脂 5 を皮膜 2 の表面に噴霧または塗布することによって形成してもよい。なお、接合体 20～23 は、アルミニウム合金材 10 や接着剤層付きアルミニウム合金材 11 と同様に、自動車用部材への加工前に、その表面にプレス油を塗布してもよい。

[0098] また、図示しないが、本実施形態の接合体に、両面に皮膜 2 が形成された（接着樹脂層付き）アルミニウム合金材を用いた場合、接着樹脂又は接着樹脂層を介して、これらの（接着樹脂層付き）アルミニウム合金材、皮膜が形成されていない他のアルミニウム合金材又は樹脂成形体を、さらに接合することが可能となる。

[0099] （第 3 の実施形態）

次に、本発明の第 3 の実施形態に係る自動車用部材について説明する。本実施形態の自動車用部材は、前述した第 2 の実施形態の接合体を用いたものであり、例えば、自動車用パネルなどである。

[0100] また、本実施形態の自動車用部材の製造方法は、特に限定されるものではないが、従来公知の製造方法を適用することができる。例えば、図 5～8 B に示す接合体 20～23 b に切断加工やプレス加工などを施して所定形状の自動車用部材を製造する。

[0101] 本実施形態の自動車用部材は、前述した第 2 の実施形態の接合体から製造されるため、高温湿潤環境に曝されても、接着樹脂又は接着樹脂層と、皮膜の水和の影響をほとんど受けることなく、アルミニウム合金基材の溶出も抑制できる。その結果、本実施形態の自動車用部材では、高温湿潤環境に曝された場合の界面剥離を抑制し、接着強度の低下を抑制することが可能となる。

実施例

[0102] 以下、本発明の実施例及び比較例を挙げて、本発明の効果について具体的に説明する。本実施例においては、以下に示す方法及び条件で、アルミニウム合金材を作製し、その接着耐久性などを評価した。

[0103] <実施例 1>

J I S 6 0 1 6 (M g : 0 . 5 4 質量%、S i : 1 . 1 1 質量%、C u : 0 . 1 4 質量%) の 6 0 0 0 系アルミニウム合金を用いて、板厚 1 m m のアルミニウム合金冷延板を作製した。そして、この冷延板を長さ 1 0 0 m m 、幅 2 5 m m に切断して基材とした。次に、この基材を、実体到達温度 5 5 0 °C まで加熱処理し、冷却した。続いて、基材を水酸化カリウムを含む p H 1 3 の水溶液で 5 0 °C にて 4 0 秒アルカリ脱脂した後、硫酸及びフッ酸を含む p H 1 の溶液で 5 0 °C にて 4 0 秒酸洗した。その後、メタケイ酸ナトリウムを 0 . 0 1 8 質量%含む水溶液（以下、ケイ酸ナトリウム水溶液ともいう）を、バーコーターで表面に均一に塗布した。その後、1 0 0 °C で 1 分間加熱乾燥させて、表面に皮膜を有する実施例 1 のアルミニウム合金材を得た。

[0104] <実施例 2>

ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を 0 . 0 5 5 質量%とした以外は実施例 1 と同様にして、実施例 2 のアルミニウム合金材を得た。

[0105] <実施例 3>

ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を 0 . 0 8 4 質量%とした以外は実施例 1 と同様にして、実施例 3 のアルミニウム合金材を得た。

[0106] <実施例 4>

ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を 0 . 1 2 質量%とした以外は実施例 1 と同様にして、実施例 4 のアルミニウム合金材を得た。

[0107] <実施例 5>

ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を 0 . 2 4 質量%とした以外は実施例 1 と同様にして、実施例 5 のアルミニウム合金材を得た。

[0108] <実施例 6>

アルカリ脱脂の時間を20秒とし、硫酸フッ酸による酸洗を行わず、ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を0.084質量%とした以外は実施例1と同様にして、実施例6のアルミニウム合金材を得た。

[0109] <実施例7>

アルカリ脱脂の時間を100秒とし、硫酸フッ酸による酸洗の時間を100秒とし、ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を0.084質量%とした以外は実施例1と同様にして、実施例7のアルミニウム合金材を得た。

[0110] <実施例8>

ケイ酸塩水溶液中のケイ酸化合物としてカネマイト（商品名：プリフィード、株式会社トクヤマシルテック製、 $n/m=2$ ）を濃度0.10質量%で用いた以外は実施例1と同様にして、実施例8のアルミニウム合金材を得た。

[0111] <実施例9>

ケイ酸塩水溶液中のケイ酸化合物として3号水ガラス（和光純薬製、 $n/m=3$ ）を濃度0.09質量%で用いた以外は実施例1と同様にして、実施例9のアルミニウム合金材を得た。

[0112] <比較例1>

ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を0.61質量%とした以外は実施例1と同様にして、比較例1のアルミニウム合金材を得た。

[0113] <比較例2>

ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を0.0061質量%とした以外は実施例1と同様にして、比較例2のアルミニウム合金材を得た。

[0114] <比較例3>

ケイ酸ナトリウム水溶液による処理を行わなかった以外は実施例1と同様にして、比較例3のアルミニウム合金材を得た。

[0115] <比較例 4>

ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を 0.12 質量%とし、処理後に表面を水洗した以外は実施例 1 と同様にして、比較例 4 のアルミニウム合金材を得た。

[0116] <比較例 5>

アルカリ脱脂及び酸洗を行わず、ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を 0.084 質量%とした以外は実施例 1 と同様にして、比較例 5 のアルミニウム合金材を得た。

[0117] <比較例 6>

硫酸フッ酸による酸洗時間を 300 秒とし、ケイ酸ナトリウム水溶液中のメタケイ酸ナトリウム濃度を 0.084 質量%とした以外は実施例 1 と同様にして、比較例 6 のアルミニウム合金材を得た。

[0118] (IR スペクトル測定)

表面に皮膜を有する各実施例及び比較例に係るアルミニウム合金材について、入射角 75° の平行偏光を使用して、FT-IR (フーリエ変換式赤外分光光度計: Nicolet 社製 Magna-750 spectrometer) 分析することにより IR スペクトルを測定し、皮膜処理前後での差スペクトルから 1440~1540 cm⁻¹ の波数領域及び 1550~1650 cm⁻¹ の波数領域におけるスペクトル強度 (吸光度) を読み取った。その結果を表 1 に示す。なお、表 1 中の「-」とは、吸光度が測定されなかったことを表す。

[0119] (皮膜成分の元素濃度測定)

皮膜中の元素成分濃度は、高周波グロー放電発光分光分析法 (GD-OES: ホリバ・ジョバンイボン社製型式 JY-5000RF) により膜厚方向にスパッタしながら測定し、アルミニウム (Al)、マグネシウム (Mg)、ナトリウム (Na)、カリウム (K)、リチウム (Li)、銅 (Cu)、鉄 (Fe) 及びチタン (Ti) 等の金属元素、及び酸素 (O)、窒素 (N)、炭素 (C)、ケイ素 (Si) 及び硫黄 (S) 等の元素について、各成分量

の測定を行った。マグネシウム (Mg)、ナトリウム (Na)、カリウム (K)、リチウム (Li)、銅 (Cu) 及びケイ素 (Si) については、皮膜中の最大濃度を、その皮膜中の皮膜濃度とした。アルミニウム (Al) については、基材と皮膜との界面近傍では基材の影響を受けるため、最表面の濃度をアルミニウム (Al) の皮膜濃度とした。ここで、これら各元素の濃度の算出において、特に酸素 (O) 及び炭素 (C) は最表面やその近傍でコンタミの影響を受けやすい。以上のことから、各元素の濃度計算では、酸素 (O) 及び炭素 (C) を除いて、濃度を算出した。なお、酸素 (O) は、最表面及びその近傍ではコンタミの影響を受ける可能性が高く、正確な濃度を測定することは難しいが、すべてのサンプルの皮膜には酸素 (O) が含まれていることは明確であった。結果を表 1 に示す。

[0120] (皮膜量測定)

皮膜量は、蛍光 X 線によって測定した。具体的には、蛍光 X 線によって皮膜中のケイ素量を測定し、校正曲線を用いて、蛍光 X 線の強度と皮膜量の換算を行い、さらに基材に含まれるケイ素量を差し引くことにより算出した。結果を表 1 に示す。

[0121] <エッチング量の測定>

エッチング量は、酸化皮膜や酸化皮膜を含む基材の溶解量であり、エッチング処理前後の重量の減少量を測定し、それを厚み (膜厚) として見積もった。なお、重量の減少量から膜厚への換算は、便宜上、アルミニウムの密度 : 2.7 g/cm^3 を用い、アルミニウムの厚みとして計算することにより行った。

[0122] <凝集破壊率 (接着耐久性) >

図 9 A 及び図 9 B は凝集破壊率の測定方法を模式的に示す図であり、図 9 A は側面図であり、図 9 B は平面図である。図 9 A 及び図 9 B に示すように、構成が同じ 2 枚の供試材 31 a, 31 b (25 mm 幅) の端部を、熱硬化型エポキシ樹脂系接着樹脂によりラップ長 10 mm (接着面積 : $25 \text{ mm} \times 10 \text{ mm}$) となるように重ね合わせ貼り付けた。

ここで用いた接着樹脂 35 は熱硬化型エポキシ樹脂系接着樹脂（ビスフェノール A 型エポキシ樹脂量 40～50 質量％）である。また、接着樹脂 35 の厚さが 250 μm となるように微量のガラスビーズ（平均粒径 250 μm）を接着樹脂 35 に添加して調節した。

重ね合わせてから 30 分間、室温で乾燥させて、その後、170℃で 20 分間加熱し、熱硬化処理を実施した。その後、室温で 24 時間静置して接着試験体を作製した。

[0123] 作製した接着試験体を、40℃、濃度 5％の塩化ナトリウム水溶液に 20 日間浸漬後、引張試験機にて 50 mm／分の速度で引張り、接着部分の接着樹脂の凝集破壊率を評価した。凝集破壊率は下記数式 1 に基づいて算出した。なお、下記数式 1 においては、接着試験体の引張後の片側を試験片 a、もう片方を試験片 b とした。

[0124] [数1]

$$\text{凝集破壊率(\%)} = 100 - \left\{ \frac{(\text{試験片 a の界面剥離面積})}{(\text{試験片 a の接着面積})} \times 100 + \frac{(\text{試験片 b の界面剥離面積})}{(\text{試験片 b の接着面積})} \times 100 \right\}$$

[0125] 各試験条件とも 3 本ずつ作製し、凝集破壊率は 3 本の平均値とした。また、評価基準は、凝集破壊率が 60％未満を不良（×）、60％以上 70％未満をやや良好（△）、70％以上 90％未満を良好（○）90％以上を優れている（◎）とした。その結果を表 1 に示す。

[0126]

[表1]

	Mg (at%)	Si (at%)	Al (at%)	ケイ酸化合物	皮膜量 (mg/m ²)	エッチング量 (nm)	Cu (at%)	IR スペクトル強度 (吸光度)		凝集破壊率 (%)	評価
								1440~1540 cm ⁻¹	1550~1650 cm ⁻¹		
実施例 1	1.8	24	66	メタケイ酸 Na	1	200	0.31	—	0.002	60	△
実施例 2	1.9	33	59	メタケイ酸 Na	3	210	0.20	—	0.005	74	○
実施例 3	1.3	45	40	メタケイ酸 Na	6	198	0.13	—	0.008	97	◎
実施例 4	1.5	62	19	メタケイ酸 Na	10	207	0.15	—	0.018	98	◎
実施例 5	0.9	75	4	メタケイ酸 Na	15	250	0.11	—	0.030	89	○
実施例 6	18	43	34	メタケイ酸 Na	9	70	0.09	—	0.005	71	○
実施例 7	1.5	52	35	メタケイ酸 Na	10	520	0.55	—	0.012	65	△
実施例 8	1.2	61	22	カネマイト	7	199	0.14	—	0.012	95	◎
実施例 9	1.8	50	41	3号水ガラス	6	186	0.14	—	0.015	96	◎
比較例 1	1.1	82	0	メタケイ酸 Na	35	227	0.09	0.1	—	10	×
比較例 2	1.8	18	74	メタケイ酸 Na	0.4	230	0.30	—	0.0008	45	×
比較例 3	1.9	12	76	メタケイ酸 Na	0	258	0.31	—	—	40	×
比較例 4	1.5	17	70	メタケイ酸 Na	0.5	210	0.25	—	—	50	×
比較例 5	35	41	17	メタケイ酸 Na	9	0	0.06	—	0.004	23	×
比較例 6	2.0	45	38	メタケイ酸 Na	11	721	0.68	—	0.007	38	×

[0127] 表 1 に示されるように、比較例 1 のアルミニウム合金材は、皮膜中の S i

濃度が本発明に規定の範囲よりも高く、 $1550 \sim 1650 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収を有さないものであり、接着耐久性に乏しかった。なお、比較例1のアルミニウム合金材は、 $1440 \sim 1540 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収を有していた。

また、比較例2のアルミニウム合金材は、皮膜中のS i濃度が本発明に規定の範囲よりも低く、 $1550 \sim 1650 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域における吸光度が本発明に規定の範囲よりも小さいものであり、接着耐久性に乏しかった。

また、比較例3のアルミニウム合金材は、皮膜中のS i濃度が本発明に規定の範囲よりも低く、 $1550 \sim 1650 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収を有さないものであり、接着耐久性に乏しかった。なお、比較例3のアルミニウム合金材は、 $1440 \sim 1540 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域にも吸収を有していなかった。

また、比較例4のアルミニウム合金材は、 $1550 \sim 1650 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収を有さないものであり、接着耐久性に乏しかった。なお、比較例4のアルミニウム合金材は、 $1440 \sim 1540 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域にも吸収を有していなかった。

また、比較例5のアルミニウム合金材は、皮膜中のM g濃度が本発明に規定の範囲よりも高く、接着耐久性に乏しかった。

また、比較例6のアルミニウム合金材は、皮膜中のC u濃度が本発明に規定の範囲よりも高く、接着耐久性に乏しかった。

[0128] 一方、本発明に規定の各要件を満足する実施例1～9のアルミニウム合金材は、高温高湿環境下での良好な湿潤耐久性を有していた。

[0129] 本発明を特定の態様を参照して詳細に説明したが、本発明の精神と範囲を離れることなく様々な変更および修正が可能であることは、当業者にとって明らかである。

なお、本出願は、2016年5月10日付けで出願された日本特許出願（特願2016-094918）及び2016年11月7日付けで出願された日本特許出願（特願2016-217096）に基づいており、その全体が引用により援用される。

符号の説明

- [0130] 2 皮膜
- 3 基材
- 4 接着樹脂層
- 5、3 5 接着樹脂
- 6、1 0 アルミニウム合金材
- 7 樹脂成形体
- 1 1 接着樹脂層付きアルミニウム合金材
- 2 0、2 1 a、2 1 b、2 2、2 3 a、2 3 b 接合体
- 3 1 a、3 1 b 供試材

請求の範囲

- [請求項1] アルミニウム合金基材と、
前記アルミニウム合金基材の表面の少なくとも一部に形成された、
ケイ素を含むアルミニウムの酸化物からなる皮膜を備えるアルミニウム合金材であって、
前記皮膜は、フーリエ変換式赤外分光法により入射角 75° の平行偏光を入射して得られる皮膜処理前後での差スペクトルにおいて、 $1550 \sim 1650 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収のピークトップを有し、前記ピークトップにおける吸光度が 0.001 以上であり、かつ、前記皮膜は、Si を 20 原子%以上 80 原子%未満及びMg を 0.1 原子%以上 30 原子%未満含有するとともに、Cu が 0.6 原子%未満に規制されているアルミニウム合金材。
- [請求項2] 前記差スペクトルにおいて、 $1440 \sim 1540 \text{ cm}^{-1}$ の波数領域に吸収を有さない請求項1に記載のアルミニウム合金材。
- [請求項3] 前記皮膜に接着樹脂を直接接合して用いられる請求項1に記載のアルミニウム合金材。
- [請求項4] 請求項1に記載のアルミニウム合金材の前記皮膜上に接着樹脂層が直接形成されている、接着樹脂層付きアルミニウム合金材。
- [請求項5] 前記接着樹脂層が有機-無機カップリング剤を含む請求項4に記載の接着樹脂層付きアルミニウム合金材。
- [請求項6] 前記接着樹脂層がエポキシ系樹脂を含む請求項4に記載の接着樹脂層付きアルミニウム合金材。
- [請求項7] 請求項1～3のいずれか1項に記載のアルミニウム合金材と他の部材とを、接着樹脂を介して接合させた接合体。
- [請求項8] 請求項4～6のいずれか1項に記載の接着樹脂層付きアルミニウム合金材と他の部材とを、前記接着樹脂層を介して接合させた接合体。
- [請求項9] アルミニウム合金基材の表面の少なくとも一部にケイ素を含むアルミニウムの酸化物からなる皮膜を形成する皮膜形成工程を備えるアル

ミニウム合金材の製造方法であって、

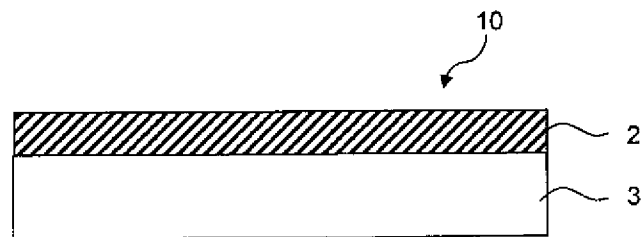
前記皮膜形成工程は、前記アルミニウム合金基材の表面に酸化皮膜を形成させる加熱処理段階と、前記加熱処理段階後のエッチング処理段階及びケイ酸塩処理段階とを含み、前記ケイ酸塩処理段階は前記エッチング処理段階より後あるいは前記エッチング処理段階と同時であり、

前記ケイ酸塩処理段階として、ケイ酸塩を0.008質量%以上0.5質量%未満含む水溶液で前記酸化皮膜を処理する、アルミニウム合金材の製造方法。

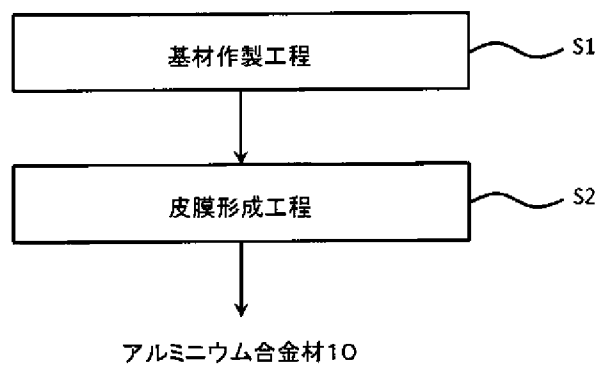
[請求項10] 前記ケイ酸塩を含む水溶液による処理の後には水洗を行わない請求項9に記載のアルミニウム合金材の製造方法。

[請求項11] 前記エッチング処理段階におけるエッチング量を700nm未満に制御する請求項9又は10に記載のアルミニウム合金材の製造方法。

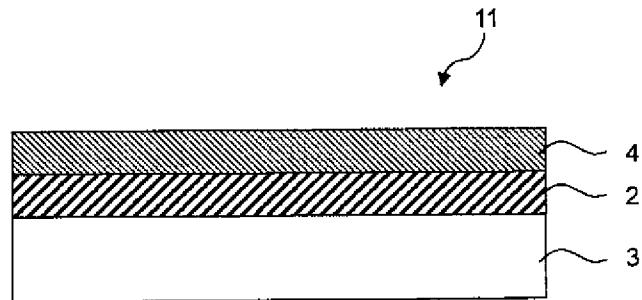
[図1]



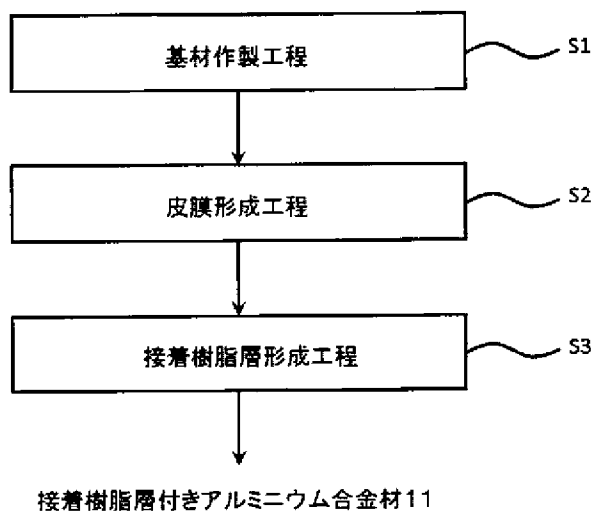
[図2]



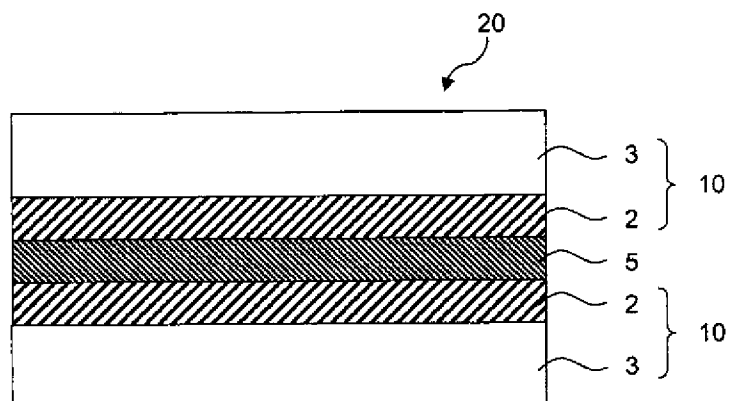
[図3]



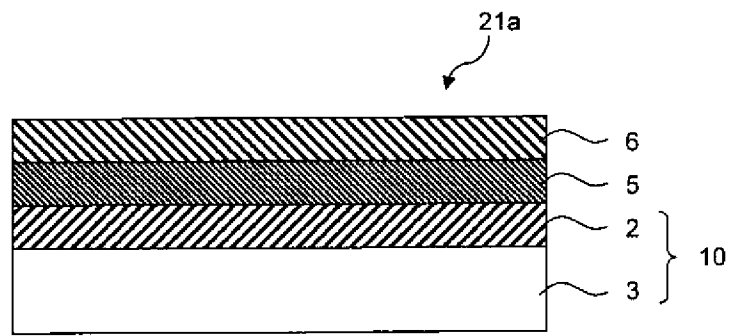
[図4]



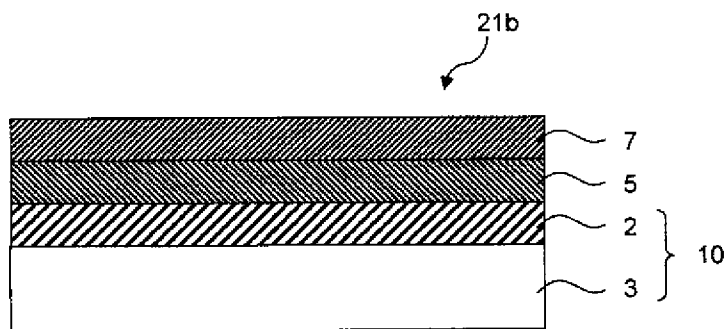
[図5]



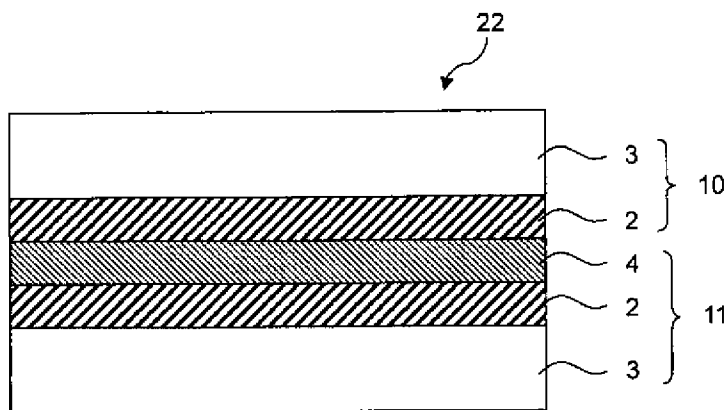
[図6A]



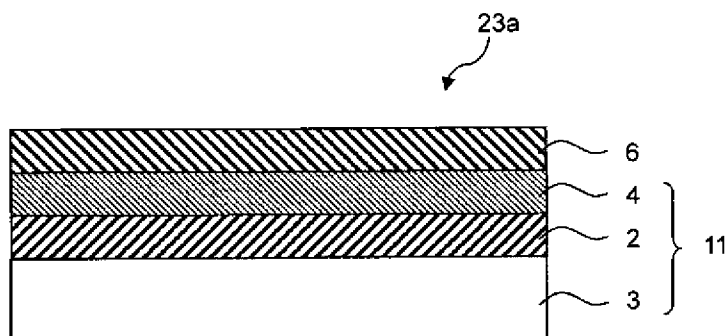
[図6B]



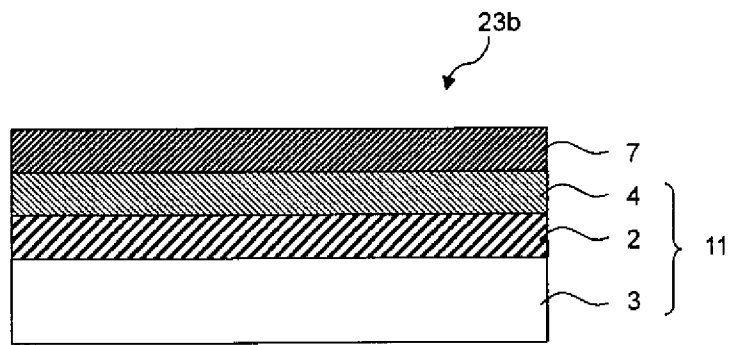
[図7]



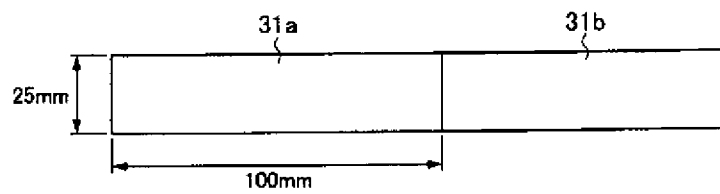
[図8A]



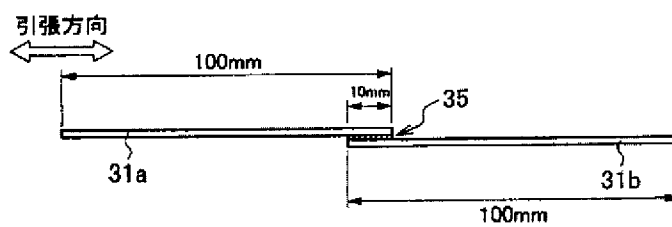
[図8B]



[図9A]



[図9B]



INTERNATIONAL SEARCH REPORT

International application No.

PCT/JP2017/017638

A. CLASSIFICATION OF SUBJECT MATTER See extra sheet.		
According to International Patent Classification (IPC) or to both national classification and IPC		
B. FIELDS SEARCHED Minimum documentation searched (classification system followed by classification symbols) C23C26/00, B32B3/14, B32B9/00, B32B15/092, B32B15/20, C09J11/06, C09J163/00, C23C8/10, C23C22/66, C23C22/68, C23C28/00, C23F1/00, C23G1/12, C23G1/34, C22C21/02, C22C21/06, C22F1/00, C22F1/05 Documentation searched other than minimum documentation to the extent that such documents are included in the fields searched Jitsuyo Shinan Koho 1922-1996 Jitsuyo Shinan Toroku Koho 1996-2017 Kokai Jitsuyo Shinan Koho 1971-2017 Toroku Jitsuyo Shinan Koho 1994-2017 Electronic data base consulted during the international search (name of data base and, where practicable, search terms used)		
C. DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT		
Category*	Citation of document, with indication, where appropriate, of the relevant passages	Relevant to claim No.
X Y	WO 2015/125897 A1 (Kobe Steel, Ltd.), 27 August 2015 (27.08.2015), paragraphs [0001] to [0107]; claims & US 2017/0066220 A1 paragraphs [0001] to [0129]; claims & JP 2015-157967 A & EP 3109343 A1 & CN 106029950 A & KR 10-2016-0111449 A	1-4, 6-9 5, 8-11
Y	JP 06-306345 A (Aisin Chemical Co., Ltd.), 01 November 1994 (01.11.1994), claims; paragraphs [0001] to [0007], [0012] to [0013] (Family: none)	5, 8
☒ Further documents are listed in the continuation of Box C. ☐ See patent family annex.		
* Special categories of cited documents: "A" document defining the general state of the art which is not considered to be of particular relevance "E" earlier application or patent but published on or after the international filing date "L" document which may throw doubts on priority claim(s) or which is cited to establish the publication date of another citation or other special reason (as specified) "O" document referring to an oral disclosure, use, exhibition or other means "P" document published prior to the international filing date but later than the priority date claimed "T" later document published after the international filing date or priority date and not in conflict with the application but cited to understand the principle or theory underlying the invention "X" document of particular relevance; the claimed invention cannot be considered novel or cannot be considered to involve an inventive step when the document is taken alone "Y" document of particular relevance; the claimed invention cannot be considered to involve an inventive step when the document is combined with one or more other such documents, such combination being obvious to a person skilled in the art "&" document member of the same patent family		
Date of the actual completion of the international search 22 June 2017 (22.06.17)		Date of mailing of the international search report 04 July 2017 (04.07.17)
Name and mailing address of the ISA/ Japan Patent Office 3-4-3, Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8915, Japan		Authorized officer Telephone No.

INTERNATIONAL SEARCH REPORT

International application No.

PCT/JP2017/017638

C (Continuation). DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT

Category*	Citation of document, with indication, where appropriate, of the relevant passages	Relevant to claim No.
Y	JP 59-175795 A (Furukawa Aluminum Co., Ltd.), 04 October 1984 (04.10.1984), claims; page 2, upper right column to lower right column; table 2 (Family: none)	9-11
Y	JP 50-157233 A (Kobe Steel, Ltd.), 19 December 1975 (19.12.1975), page 1, lower left column to page 2, lower left column (Family: none)	10-11
Y	JP 64-022383 A (Nihon Parkerizing Co., Ltd.), 25 January 1989 (25.01.1989), pages 1 to 3 (Family: none)	10-11

INTERNATIONAL SEARCH REPORT

International application No.

PCT/JP2017/017638

Continuation of A. CLASSIFICATION OF SUBJECT MATTER

(International Patent Classification (IPC))

C23C26/00(2006.01)i, B32B3/14(2006.01)i, B32B9/00(2006.01)i,
B32B15/092(2006.01)i, B32B15/20(2006.01)i, C09J11/06(2006.01)i,
C09J163/00(2006.01)i, C23C8/10(2006.01)i, C23C22/66(2006.01)i,
C23C22/68(2006.01)i, C23C28/00(2006.01)i, C23F1/00(2006.01)i,
C23G1/12(2006.01)i, C23G1/34(2006.01)i, C22C21/02(2006.01)n,
C22C21/06(2006.01)n, C22F1/00(2006.01)n, C22F1/05(2006.01)n

(According to International Patent Classification (IPC) or to both national
classification and IPC)

A. 発明の属する分野の分類（国際特許分類（I P C））

Int.Cl. 特別ページ参照

B. 調査を行った分野

調査を行った最小限資料（国際特許分類（I P C））

Int.Cl. C23C26/00, B32B3/14, B32B9/00, B32B15/092, B32B15/20, C09J11/06, C09J163/00, C23C8/10, C23C22/66, C23C22/68, C23C28/00, C23F1/00, C23G1/12, C23G1/34, C22C21/02, C22C21/06, C22F1/00, C22F1/05

最小限資料以外の資料で調査を行った分野に含まれるもの

日本国実用新案公報	1922-1996年
日本国公開実用新案公報	1971-2017年
日本国実用新案登録公報	1996-2017年
日本国登録実用新案公報	1994-2017年

国際調査で利用した電子データベース（データベースの名称、調査に使用した用語）

C. 関連すると認められる文献

引用文献の カテゴリー*	引用文献名 及び一部の箇所が関連するときは、その関連する箇所の表示	関連する 請求項の番号
X	WO 2015/125897 A1（株式会社神戸製鋼所）2015.08.27, 段落0001-0107, 請求の範囲	1-4, 6-9
Y	& US 2017/0066220 A1, 段落0001-0129, 請求の範囲 & JP 2015-157967 A & EP 3109343 A1 & CN 106029950 A & KR 10-2016-0111449 A	5, 8-11
Y	JP 06-306345 A（アイシン化工株式会社）1994.11.01, 特許請求の範囲, 段落0001-0007, 0012-0013 (ファミリーなし)	5, 8

☒ C欄の続きにも文献が列挙されている。☐ パテントファミリーに関する別紙を参照。

* 引用文献のカテゴリー

「A」特に関連のある文献ではなく、一般的技術水準を示すもの
「E」国際出願日前の出願または特許であるが、国際出願日以後に公表されたもの
「L」優先権主張に疑義を提起する文献又は他の文献の発行日若しくは他の特別な理由を確立するために引用する文献（理由を付す）
「O」口頭による開示、使用、展示等に言及する文献
「P」国際出願日前で、かつ優先権の主張の基礎となる出願

の日の後に公表された文献

「T」国際出願日又は優先日後に公表された文献であって出願と矛盾するものではなく、発明の原理又は理論の理解のために引用するもの
「X」特に関連のある文献であって、当該文献のみで発明の新規性又は進歩性がないと考えられるもの
「Y」特に関連のある文献であって、当該文献と他の1以上の文献との、当業者にとって自明である組合せによって進歩性がないと考えられるもの
「&」同一パテントファミリー文献

国際調査を完了した日

22.06.2017

国際調査報告の発送日

04.07.2017

国際調査機関の名称及びあて先

日本国特許庁（I S A/J P）

郵便番号100-8915

東京都千代田区霞が関三丁目4番3号

特許庁審査官（権限のある職員）

柵屋 健太郎

電話番号 03-3581-1101 内線 3425

4E

3635

C (続き) . 関連すると認められる文献		
引用文献の カテゴリ*	引用文献名 及び一部の箇所が関連するときは、その関連する箇所の表示	関連する 請求項の番号
Y	JP 59-175795 A (古河アルミニウム工業株式会社) 1984. 10. 04, 特許請求の範囲, 第 2 頁右上欄－右下欄, 第 2 表 (ファミリーなし)	9-11
Y	JP 50-157233 A (株式会社神戸製鋼所) 1975. 12. 19, 第 1 頁左下欄－第 2 頁左下欄 (ファミリーなし)	10-11
Y	JP 64-022383 A (日本パーカライジング株式会社) 1989. 01. 25, 第 1－3 頁 (ファミリーなし)	10-11

発明の属する分野の分類

C23C26/00(2006.01)i, B32B3/14(2006.01)i, B32B9/00(2006.01)i, B32B15/092(2006.01)i, B32B15/20(2006.01)i, C09J11/06(2006.01)i, C09J163/00(2006.01)i, C23C8/10(2006.01)i, C23C22/66(2006.01)i, C23C22/68(2006.01)i, C23C28/00(2006.01)i, C23F1/00(2006.01)i, C23G1/12(2006.01)i, C23G1/34(2006.01)i, C22C21/02(2006.01)n, C22C21/06(2006.01)n, C22F1/00(2006.01)n, C22F1/05(2006.01)n